佐久の先人たち㊳

幕末・明治を生き抜いた女流俳人

佐藤採花

（1844～1901年）

明治維新という世相の大きな変革期を俳句一筋に生き抜いた女流俳人。全国を巡り自己を磨き続けたが、望郷の念強く、常に郷里に想いを馳せていた。俳句を通じて、佐久地方の文化に大きな足跡をのこした。

●業俳の道

佐藤採花は、一八四四（天保15）年一一月五日、江戸時代末期の中山道塩名田宿（旧中津村、現佐久市）の佐藤両八・きはの次女として生まれ、本名を「たつの」といった。

採花の幼少時代は江戸に出て、娘義太夫を演じながら父親と生活をしていたという。

一五歳の時帰郷し、北大井村八満（現小諸市）の俳匠小林葛古に入門し、その後塩名田で寺子屋を開き、多くの門人を集め、その道の大切さを教えたという。再び江戸へ出た採花は、のちに明治政府の俳諧教導職となる橘田春湖に入門し、その後小森卓郎の内弟子となっている。やがて俳人池永大蟲と同居をはじめ、二八歳の時「蜂庵」と号した。

女性の業俳（プロの俳人）が少ない時代に、全国各地を廻り、多くの文人と交わることで自己を磨き、句の道をきわめようとした。この全国への遍歴により、剛毅な性格と、開拓精神の旺盛さが培われ、誰でも「刺す」ところからきたと伝わる「蜂庵」の号の由来からは、採花の気の強さがわかる。

当時俳句を作ることは、一種の教養や娯楽であり社交の手段でもあった。しかし女性として俳諧のなかで相応のポジションを占め、業俳として活動を続けていくのは決して容易なことではなかったであろう。明治期に発行された様々な業種に関する「番付」において、採花の名前はよく登場し、人気実力ともに兼ね備えていたことがうかがえる。

●今なお続く採花への想い

採花の遍歴は、北は北海道から東北地方一円に、また佐渡に甲州、京都にと続き、東京においてももちろん多くの人と交わり、自己を磨く旅となった。

俳人採花は二八歳のときに独立し、その後も全国各地を廻り知遇を得ながら、最後は東京浅草旅籠町二丁目二番地に定住し、ときおり塩名田にも帰ってきた。

塩名田に建立された採花の句碑
「さえずりや野山も匂う雨の跡」の句が刻まれている

活動の様子などは、郷里に近い桜井の日本画家柳沢文真との手紙のやりとりからうかがうことができる。

こうして東京を本拠地として活躍するも、一九〇一（明治34）年四月七日、浅草の自宅で五八歳の生涯を閉じた。墓は東京北区西ケ原の昌林寺に建てられた。正面に刻まれた「蜂庵採花禅尼」の法名は、高名な高橋泥舟の筆による。更に翌年一周忌には谷中（東京都台東区）の全生庵に略伝と「汐時の是にもあるかちる桜」の作品を刻んだ大碑が建てられた。

郷里塩名田では、没後一〇〇年の歳月を経て「囀りや野山も匂ふ雨の跡」と詠まれた句碑が建てられた。朝な夕なに通る人々の心を和ませてくれている。

●季節豊かな表現

採花は、一八七五（明治8）年『袖日記』を、翌年『穂あかり』を、一八八一年九州の築紫に赴くにあたり『こればかりは』を、と次々に世に出している。まさに東奔西走の日々を送り、更に一八八二年正月には、『歳日摺』を発行し、以後一九〇〇年まで毎年刊行した。

ここで採花の数多くの作品の中で、季節豊かな表現で詠んだ句から春夏秋冬の代表作を紹介し、次の世代に伝えたい。

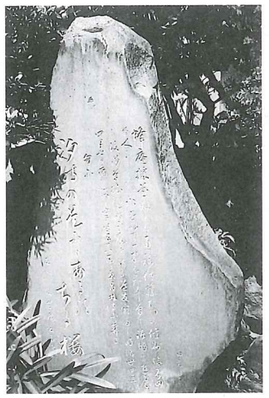
春　○味わいもはじめて苦し春の水（辞世句）
夏　○たのしみも長き牡丹の莟み哉
秋　○澄々て野山も月の名残かな
冬　○花よりもこまかし枝にくばる雪

●中山道宿場町塩名田宿と農村文化

塩名田の地は西側に千曲の大河を擁し、大雨のたびに橋（昔は木や土の橋）が流失し旅人を苦しめてきた。道ゆく旅人は俳人達も多く、地元との交流も他と比較すると多かった。それは宿場ゆえに本陣や問屋が置かれ活発な交流がなされていたからである。しかし一世を風靡した俳人達も時と共に他界する。先達者に政山・柯則・鶏山がおり、当時、李雪・素澄という二人の俳人が活躍していたという。当時の俳人層は庶民文化の原点であると解されているが、そこまで庶民には広まっておらず、武士や富商・豪農などに限定されていた。塩名田宿は中山道の繁華な宿駅であったから、他の農村部より早くから俳諧は浸透していた。

幕末には女流俳人として全国に知られた採花が登場し、明治期を色どり、文壇で活躍し、農村庶民文化を広めたのである。

戦後間もない一九五〇（昭和25）年一月に、中津中学校（現浅科中）新聞部が発行した『中津中学校新聞　第四号』には、詩二〇人・俳句二五人・歌七人・作文二〇人と、思い思いの作品が並べられている。ここからも浅科地区の先人が残した文化の継承がみてとれる。

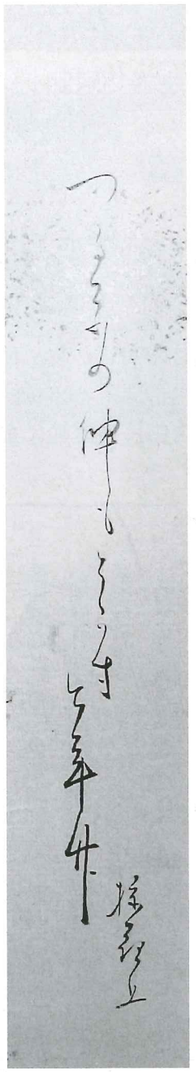


全生庵の句碑
2メートルをこす大碑で、
「汐時の是にもあるかちる桜」
の句が刻まれている

今なお、上原地区の「土のうた」、矢嶋地区の「愛句会」、塩名田地区の「あすなろ」といった浅科地域で続く俳史会のクラブ活動が、伝統の一旦を担っている。まさにその重みを痛切に感じる。

雪降る大碑に寄り添えば
詩の心が響く人情の里

（佐藤治郎・虎雁）



短冊に記された採花の筆跡

「つる草の　伸もとゝか寸　今年竹　採花女」
（つる草の　伸もとどかず　今年竹）

○参考文献
長野県北佐久郡編『北佐久郡志』　一九一五
浅科村史編纂委員会編『浅科村史』浅科村　二〇〇五
佐藤武利編『女流俳人蜂庵採花』　二〇〇五